

# coolLogic

## 情報提供の次はコミュニケーション環境サービス

どうやら「portal」(ポータル)というコンセプトは非常にわかりやすかつたらしく、  
いろんなサイトが「パーソナルな情報世界の入り口」を目指して機能強化に乗り出すようだ。  
なかでも、ユーザー各々の興味や関心に応じた情報を取り揃える情報サービスには大きな期待が集まっている。  
ブラウザを立ち上げると自動的に「MY PAGE」が表示され、そこにはパーソナライズされた……  
つまり、ユーザーの設定したパラメーターでフィルタリングされた最新の情報が待っている。  
こんなシーンは容易に想像できるし、その便利さもよくわかる。  
「簡単なアンケートでこんなに便利な情報が手に入るなら」と考えて、自己登録するユーザーもどんどん増えるだろう。  
もっとも、ユーザーの数が増えれば増えるほど、多様な関心に応える大量の情報をいろんなメディアから集めてこななければならない。  
また、ユーザーの情報をマーケティングデータとしてお金に替えていくのは、単なる広告スペース販売とは比較にならない、  
ビジネス的にも大きなチャレンジだ。しかし、苦勞すればそれなりのリターンは得られるはず……そう考えるのは間違っていないと思う。  
ただ、1つだけ気に留めておいたほうがいいと思うのは、人間、いつまでも好みや興味が変わらないわけがない、ということ。  
「変わらない」というのは「いつも同じ」、「進歩がない」ことでもあるわけだし、結局「つまらない」ということにもつながる。  
いつかはこうしたサービスに飽きても不思議はない。  
そう考えると、次のステップとして、単にパーソナライズされた情報を供給するのではなく、  
もっと積極的にユーザーの興味・関心に変化を引き起こすような仕組み、たとえば、ユーザー相互のコミュニケーションを利用して  
面白さを引き出す仕組みや手法などが、もっと注目されてもよいのではないかと思う。  
すでにユーザー同士が生み出す情報のダイナミクスでサイトを活性化しようと、コミュニティーの演出に乗り出すサイトも増えているという。  
パーソナライズされた情報提供に加え、面白い仲間が集まったコミュニティー、そしてそこに新しいスタイルのコミュニケーション環境、  
おまけにショッピングでも加われば、ポータルサイトとしての価値もさらに高まっていくと思うのだが、いかがだろうか？



## メディアプランナーのための クリエイティブデザイン批評



HipBONE Software ホームページ

## 新しいTCIアプリケーションへ発展するか 身近で楽しいウェブ共有「Co-navigator」

HipBONE Software <http://www.hipbone.com/>

### ダイナミックなコミュニケーションの ための「情報白板」

ライブ、オンデマンドのいかにかわらず、情報の送り手と受け手の立場がはっきりしていて、その関係を保ちながら一方的に情報を伝達する様式、簡単に言えば単純な情報伝達技術の発達が目覚ましいものがある。

それに比べると、コトあるごとに情報の割り込みが行われる相互触発的コミュニケーションのための技術、別の言い方をすると、情報の送り手と受け手が相互の立場をダイナミックに入れ替えながら情報交換を行って相談をすとか、理解を深めるとか、その結果なんらかの合意に達したり、新しい情報を生み出したりというスタイルの技術については、まだ明確な方向が見えてこない。

これまで、離れた場所にいる……ということは、ヒトとヒトの間に電子的なメディアなどを挟むもっともな理由があるということだが、本質的には実際に離れた場所にいる必要はない……ユーザー同士が同期的に、瞬時に立場を変えたり、相手の発言の合間に割り込みながらコミュニケーションを行う際に適したメディアといえば、せいぜい電話しかなかった。最近では、その発展形である「テレコンファレンス」、もっと範囲を広げても「チャット」に注目が集まる程度だった。

しかしここに来て、「CTI」(Computer Telephony Integration) という考え方が注目されるようになってきた。音声メディアを中心に、さまざまなメディアの特性を洗い直し、デジタル技術で種々のメディアを再統合して新しいシステムを作りだそうというのである。

ところで、この統合的コミュニケーションシステムを設計する際の1つのポイントは、関係者全員が何をしながら話を進めるかという

点にあるのではない。つまり、どのようなスタイルの情報をベースにコミュニケーションを展開するかが問題であると思う(会議をする場合に白板がある部屋と何も無い部屋、どちらが能率的かを考えてみていただきたい)。

そこで当然候補として出てもおかしくないのがウェブページ……なのだが、これだけポピュラーになり情報伝達的手段として高い評価を得てはいるものの、複数のユーザーがインタラクティブなコミュニケーションを行うためのベース＝「電子白板」としては、それほど期待されているわけではなかった。

### 同期的なウェブサーフィンが もたらす新しい面白さ

もちろん、これまでにウェブを遠隔地のユーザーがシェアすべき情報の表示装置として利用することを考えた人もいないではない。しかし、もしウェブを同期的に、つまりここで言うように何らかのコミュニケーションのためのベースとして利用しようとするれば、自分がWWWブラウザを操作すると同時にURLを電話で伝えたり、チャットでタイプしたりして、相手に共有すべきウェブページのURLを逐一タイプしてもらわなければならない。

こうした欠点を解消したウェブ共有の仕組みがこの「Co-navigator」である……というふうにもったいぶった前置きで紹介してしまうと、とんでもなく大それたアプリケーションのように聞こえるかもしれないが、実際は世界中に広がったウェブ自体をゲーム感覚で遊ぶための、オモチャのように楽しいJavaプログラムだ。

Co-navigatorをウェブ上で提供しているHipBONE社は、サン・マイクロシステムズが行った「'96 Java Cup International」コンテストの賞金を元手に、元NeXT / Appleの社員らがドロップアウトして作ったという、

なにげに興味をそそられるベンチャー企業。

同社によれば、このアプリケーションは2人以上の人間(技術的には何人でも一緒にナビゲートできるが、6人以下を推奨)と一緒にウェブをサーフィンすることができる最初の無料サービスで、Javaプログラムであるためプラグインなどをダウンロードする必要はない。本来的には全てのプラットフォームをつなごうという企画だが、残念ながら現在のところJavaが動くウィンドウズ用のブラウザ(インターネットエクスプローラ4.0か、ネットスケープナビゲーター4.0以上)だけを対象にしている。

このサービスでは、利用者は……

- どのリンクでもクリックできる
- URLをタイプできる
- サーチができる
- フォームへ入力できる
- オーディオやビデオを楽しめる
- ソフトウェアをダウンロードできる

そして、利用者のうち誰かが上記のアクションを行えば、同一グループのユーザーであればまったく同じ動作を体験できるという便利ものだ。また、チャットの機能も備わっているが、残念ながら日本語は通らない。

ちなみに、同種のアプリケーションとして、米国のTribal Voice社製のフリーソフトウェアTCP/IPチャットシステム「PowWow」(<http://www.tribal.com/>)がある。こちらは通常7人まで参加でき、フォントを選べば漢字も使える。基本的に文字ベースだが、14.4Kbps以上なら一対一の音声チャットも可能で、WWWブラウザと連動させる「クルーズ機能」を使うと、1人が全員を同じウェブサイトに案内できる機能を持っている。ただし、こちらはアプリケーションなので、全員があらかじめプログラムをインストールしておく必要がある。

## 音声チャットとの併用で パワフルなコミュニケーションツールへ

「Co-navigator」の使い方は簡単だ。ホストとなる利用者がHipBONEに登録してIDを取得する（臨時のIDを取得することもできる）必要があるが、一緒にネットサーフィンをする相手（ゲスト）にはその必要はない。

- ① HipBONEのホームページで登録し、IDを手に入れる（仮のIDでも可）
- ② ホームページの「Host」で「Start」をクリックする
- ③ 一緒にサーフィンしたい相手に、「http://www.hipbone.com/」にアクセスした後に「GUEST」パネルをクリックし、あなたのIDと自分のファーストネームをタイプして「Start」をクリックするよう伝える
- ④ 相手がログインしてくるとJavaウィンド

ウに友達の名前が表示されるので「Accept」をクリックする

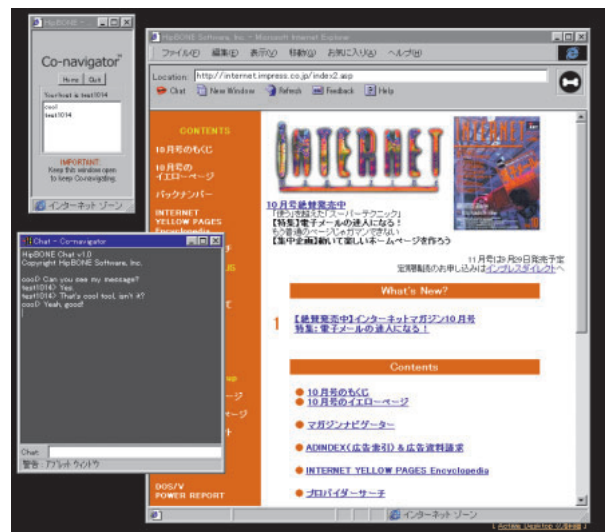
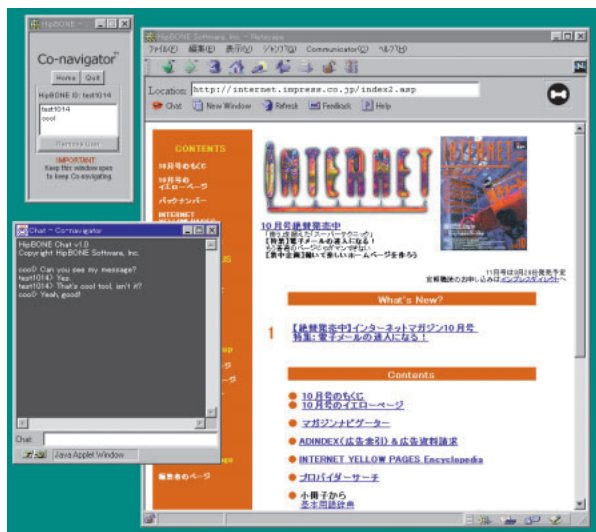
.....というステップを踏めば簡単に相手と一緒にウェブサーフィンできる。

このサービスの利用法としては、初心者（複数？）を相手にウェブの使い方を教えたり、面白いコンテンツのガイド、たとえばアートミュージアムのオンラインツアーなどが考えられる。ひょっとしたらこれを使った「ウェブジョッキー」や家庭教師みたいなものが出てきてもおかしくない。

実際に米国では、旅行サイトを見ながら休暇のプランを一緒に作ったり、地図サイトを見ながらアパートを探したり、オンラインショッピングを一緒にしたりという使い方がされているようだ。このほかにも不動産屋がウェブ上の売買物件を顧客に見せる形のセールスやサービス、トレーニング、遠隔地教育などでの利用も考えられるだろう。

HipBONE社としては「友達が友達を呼ぶ」という例の方式で登録を呼びかけて普及をめざす一方、コミュニティ向けの目玉アプリケーションとしてポータルサイトと提携する話も進めているらしい。

試しに多少使ってみたが、なかなか面白い。ただ、この手のサービスでは不可欠のチャットモードも備わっているものの、電話を併用するほうがもっと実用的だ。この点、IPベースのテレフォニー技術を専門に開発しているCallworks社が音声との統合利用が可能な製品を来年初めには発表する予定だというから、こちらのほうの展開にも期待してみたい。



2人でウェブを共有している状態。WWWブラウザの左上部分にある「Chat」をクリックすると、チャット用のウィンドウが開く



musicmusicmusic ホームページ

## ストリーミングコンテンツをドライブする 「セルフプログラマブル」という考え方

musicmusicmusic <http://www.musicmusicmusic.com/>

### インターネット独自の番組スタイルとは

インターネット上のコンテンツ・ビジネスを考えるうえで、ストリーミング技術を使ったオーディオやビデオ番組、いわゆるインターネット放送には当初から大きな期待が寄せられてきた。しかし、現実にはビジネスとしてきちんと成り立っているかという点、なかなか順調とは言い難いようだ。

多くのユーザーの通信環境が従量制であることや、コンテンツ制作側がこなさなければならない著作権処理に目処がつかないといったビジネス上の課題など、克服すべき問題は多々ある。さらに、コンテンツの企画面でも考えるべき点は多い。

だが、少なくとも新しく登場したメディアが、旧来のラジオやテレビの下手なマネでお茶を濁しているわけではないだろう。インターネット放送が本格的にテイクオフできない最大の原因は、従来の放送型メディアにはない、インターネットならではの環境を利用したプログラムのかたちが見えないことなのではないか。それが分からないかぎり、インターネット放送はいつまでたっても、質の悪いラジオやテレビの焼き直しに留まる。独自のキャラクターが出せないメディアは生き残れないだろうし……。

そんなことを考えていたら、ここに来て、「本命」とは言えないかも知れないが、興味深いコンテンツフォーマットが見えてきた。それがユーザーのちょっとした洒落つけをうまく利用する「Self-Programmable」という番組形式である。

### 「あなたも番組ディレクター」

ここ数か月の間に「Self-Programmable Radio Station」、簡単に言えば制作者側が

すべてのコンテンツを作るのではなく、(あくまでも結果的に)ユーザー自身にコンテンツを作らせてしまうインターネットラジオのような構想が相次いで発表されている。

たとえば「Imagine Radio」(<http://www.imagineradio.com/>)。このサイトでは、登録リスナーに好きなバンドとジャンルを選ばせ、「かけないで欲しい」から「頻繁にかけて欲しい」までの6段階のランクを付けてもらい、このユーザーの好みをもとに候補曲を選択し、ランダムな順番で曲をオンエア(?)する仕組みを作ったという。簡単に言えば、ユーザーからのリクエストをベースにしたいわゆる「リクエスト専門局」ではあるのだが、番組の作り方にインターネットの特性をうまく活かし、極めて細かいレベルまでユーザーの希望を取り込みながら、それと同時に半自動的にプログラムを生成する仕組みそのものをデザインしたという点は注目に値すると思う。

MTVヨーロッパのサイト「M2 - Television Music」(<http://www.m2europe.com/>)では、同じような仕組みをちょっとアレンジして新しい試みを行なっている。

このサイトにアクセスするユーザーは、所蔵されている1500本のビデオクリップデータベースの中から14本を選ぶという形でビデオプログラムを編成する。ユーザーの作成した曲目リストはM2側に送られ、審査にパスしたものについてはユーザーの名前がクレジットされて後日ミュージックビデオプログラムとして放送されるという。つまり、ユーザー自らの選曲で番組が制作され、オンエアされるわけで、音楽ビデオフリークにとっては自分があたかもディレクターになったような喜びを得られる、というわけ。「あなたもディレクター!これぞインターネット時代のユーザー参加型音楽番組」という謳い文句が見えるようだ。

### 音楽サイトの目玉

#### 「オールリクエストラジオ」

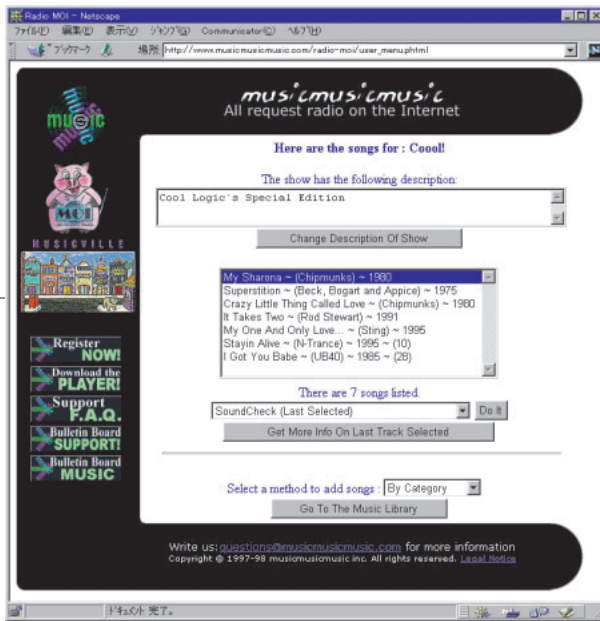
こうした間接ワザでなく、ストレートに「Self-Programmable」というコンセプトを推し進め、完全に個人向けにカスタマイズされた番組をサイトの目玉としているのが「All Request Radio on the Internet music musicmusic」(<http://www.musicmusicmusic.com/>)。カナダのベンチャー企業が昨年のクリスマスにスタートした音楽サイトだ。

サイトそのものは「Musicville」というCDのオンラインショッピングや音楽情報検索サービスなどが併設された総合音楽サービスサイトで、通常のラジオのようにサイト運営者側が作成したプログラムも用意されているが、このなかの呼び物が、登録すれば誰でも無料で利用できるVirtual Jukebox「radio-moi」(my radio)である。

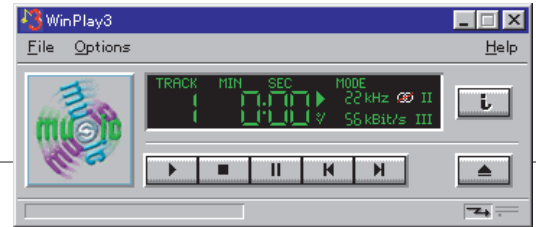
サイトには1940年から1997年までのトップ40を中心に10000曲以上の楽曲がCDに近いクオリティーでデータベース化されており、バイオグラフィーや解説、歌詞などとともに毎月2000曲が追加されるという。ユーザーはこのなかから好きな曲をリスト化し、オンデマンド形式で聴くことができるという仕組みである。

また、こうして作成されたプログラム(曲順のリスト)はユーザー指定のファイル名で保存され、誰もがオンデマンドで聞ける「Other People's Shared Shows」という番組として公開される。自分の選曲センスを世界中の人にアピールできる。ここでも「あなたもディレクター!」というわけである。

これ以外にも、年代の範囲を指定すればその時代のヒット曲をランダムにプレイしてくれる「Time-Machine」といった番組もある。



ユーザーはカテゴリーやアーティスト名で局を検索し、自分だけの番組を作ることができる



MusicMusicMusic専用のMP3プレーヤー  
「WinPlay3 musicmusicmusic version」

【注】番組を聞くためには、同サイトのウェブページ ([http://www.musicmusicmusic.com/winplay\\_download.shtml](http://www.musicmusicmusic.com/winplay_download.shtml)) から無料の専用プレーヤー「WinPlay3 musicmusicmusic version」([http://www.musicmusicmusic.com/mmm\\_play.exe](http://www.musicmusicmusic.com/mmm_play.exe)) をダウンロードする必要がある。

この専用mp3オーディオプレーヤーは、musicmusicmusicが採用している独自規格によるストリーム型のサービスに対応している他、通常のかたちでのmp3ファイルの再生、つまりファイルを一旦PCにダウンロードして再生する機能も持っている。カラフルなインターフェイスで最近人気の高いmp3プレーヤー「WinAmp」は、残念ながらこのストリーム規格に対応していないため、このサイトでは利用できない。

## 著作権処理さかたづけば.....

非常に興味深いコンセプトで運営されているmusicmusicmusicだが、当然このサイトにもいろいろな不可解な点がある。

まずオーディオ再生に用いられているのが、今やストリーミングコンテンツ用のデファクトスタンダードとなった「RealAudio」ではなく、特別に改造されたmp3のプレーヤー「WinPlay3 audio player」だという点。そのため、サービス利用者はわざわざこれを手に入れ、インストールしなければならない。

ところでインターネットでmp3採用という、ついファイルをダウンロードして再生というスタイルを考えてしまうと、実は「著作権契約によってそのような使い方は認められていない」ということでmusicmusicmusic.comが提供するのはストリーム型のサービスのみ。というわけで、ファイルをダウンロードしてローカルで再生することのないよう、「live-streaming mp3s」と「Multi-Media Protection Protocol」という規格に対応した専用プレーヤーを独自採用することになったようだ。

それでも強いてmp3規格でなければならない根拠にはならないような気がするが、どうやらゆくゆくはデジタル化したオーディオフ

ァイルをオンライン販売する「Digital Download Audio」のようなビジネス展開をにらんでいるから、最初からmp3を採用してデータベース化しておきたいのではないだろうか。ともかく、なんとなくすっきりしないものがあるのは事実。

しかし最大の問題は、自分で選曲をして番組を作る際に、選択リストの中に曲が記載されているのに実際にプレイできない曲がかなり多いという、「Self-Programmable」コンセプトの根幹にかかわる制約の問題である。

サイト側の説明によれば、これはレコード会社との使用許諾契約によって「曲の使用スタイル」が制限されることがあるからだ、という。

「曲の使用スタイル」とはごく大ざっぱな言い方をすると、曲の中にはユーザーの指定によって一曲をまるごと再生する.....つまりこのサービスのようにユーザーが曲を選択し、リストを作成したらその順番に曲を演奏するというかたちで利用される.....インタラクティブな「ジュークボックスの利用」の対象としてよいものと、そうしたスタイルの利用はできないが、制作者側の意図で音楽番組の一部として再生するという（通常の音楽プログラムのな）かたちなら利用できるものがあるというわけだ（こちらの方は、データペー

ス中では「Non-Interactive」と表示される）。

この制限を受けて、運営者側も「もしあなたが聞きたい曲がNon-Interactive指定を受けており、自作のプログラムに入れられない場合には、運営者側が作成している番組にリクエストしてくれれば放送するように努力します」と書いている。

これらの事情は分かったとしても、現実には新し目の曲に制限が付けられていることが多く、ユーザーが面白いプログラムリストを作ろうとすると大変苦労することは間違いない。いきおい、オールディーズものばかりになってしまったりして.....。だが、著作権処理の道筋が付けば当初の目論見どおり、非常に面白くなることは間違いないのだから、ここはやっぱりじっくり我慢か？

蛇足ながら、カナダのサイトであるから当然といえば当然なのだが、どうやら収められている曲はカナダ系のもが多そうだ。ポピュラーカルチャーの面で隣国アメリカに押されっぱなしのカナダとしては、こうした形で少しでも自国の文化が世界に流れることは歓迎すべきことなのだろう。このサイトを眺めながら、日本も自国の文化を広く世界にマーケティングしようと思うなら、ぜひとも早く取り組むべき方向だとの感を強くした。



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)